

令和 6 年 6 月 2 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20023

研究課題名（和文）古今集時代の歌材形成に関する研究

研究課題名（英文）The diversity in the formation of Waka in the Kokinshu period

研究代表者

蒲 こうえん（PU, JIAOYAN）

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・招へい研究員

研究者番号：20967781

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：1.古今集時代の「新歌材」の全体像を提示するために、主に宇多朝から朱雀朝までを基本範囲とし、現存する古今和歌集、私家集25集、私撰集4集、歌合39回を研究対象として、「新歌材」を収集した。2.「白菊」という「新歌材」に着目し、その形成過程を跡づけ、和漢比較文学大会で発表した。3.また、「白き月光」という「新歌材」を扱い、古今集時代に至るまでの過程を明らかにし、日本文学研究会で発表した。4.さらに、「嵐」という「新歌材」を扱い、江戸時代の狩谷えき斎から古代、また中国の文献資料に遡り、その語源及び使用法を究明し、三回わたって水門の会『箋注倭名類聚抄』研究会で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本古典の起点とされる古今集時代の和歌の生成基盤を考え直すことに大きい意義を持つ

研究成果の概要（英文）：This research takes up the new poetry material of Waka, which composed in the Kokinshu period. And attempts to demonstrate the diversity in the formation of the new poetry materials by empirically examining the process of their formation. 1, I had taken up the new poetry material of the white moonlight, and examined the process of its formation. The results were presented at the Wakan Comparative Literature Association. 2, I had picked up the new poetry material of white chrysanthemum, and examined the process of its formation. The results were presented at the Japan Literary Research Association. 3, I also tackled the new poetry material of tempest, researched the etymology and usage of the word by tracing it back to ancient and Chinese literature, starting with Kariya ekisai in the Edo period, and presented the results three times at The minato.

研究分野：日本文学

キーワード：古今集時代 和歌 和漢

## 1. 研究開始当初の背景

### ◆昭和三十年代から五十年代

古今集時代の表現研究はひとときわ活況を呈した。主に万葉集から古今集への歌風の変化、すなわち掛詞・縁語の発達や歌枕・見立ての成立という視点から論じられたのである。しかし、この時はまだ、古今集時代の和歌を上代和歌と比較すると、「新歌材」が詠まれるようになるという変化は、看過されていた。

### ◆昭和五十年代以後

「新歌材」は漢詩文の影響下に成立することは、昭和五十年代以後の研究の中で急速に解明された。まず、『古今集以前』(塙書房、1972)などでは、古今集時代の個々の新歌材について、それが特定の漢詩文の原典から直接的に影響を受けて成立したという影響関係が指摘された。これ以来、古今集時代の「新歌材」は漢詩文の影響を受けていると考えられるのが通説となった。

この通説を修正したのが、渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』(勉誠社、1991)である。渡辺は古今集時代の和歌表現が直接的・単線的に漢詩文の原典から直接的に影響を受けるといふより、平安漢詩文の表現層を介して、そこからの流入・摂取があるとし、中国漢詩文からの直接的な受容ルートを修正した。

以後古今集時代の和歌表現について考える際、漢詩文の影響を考慮に入れることは不可欠の手段となった。その流れの中では、三木雅博『平安詩歌の展開と中国文学』(和泉書院、1999)では平安和歌は「受容 変容 再受容 再変容」という形式で漢文学から影響を受けながらも、独自の受容を果たしているの実証的に論じるものもあるものの、現在に至るまで、例えば岩井宏子『古今的表現の成立と展開』(和泉書院、2008)のように漢詩文の一方的影響下で成立したと指摘され続ける。

上記に記したように、古今集時代の「新歌材」については、漢詩文の影響を受けて成立したという小島説が継承されるのみであった。軌道修正された部分もあるが、漢詩文から一方的に影響されるという根本的な考えは変化していないのが研究の現状及び背景である

## 2. 研究の目的

本研究の目的は漢詩文の一方的影響下で成立した「新歌材」を再検討し、漢詩文の一方的影響下で成立するという先行研究の方法を根本的に捉え直したうえ、古今集時代の「新歌材」を網羅的に扱い、それらの形成過程を実証的に検討することにより、「新歌材」形成の多様性を体系化し、古今集時代の和歌を考える上で基盤となる視座を提示することである。

## 3. 研究の方法

本研究では、古今集撰者時代及びその後撰者たちを中心として活躍する時代を古今集時代とし、古今集時代の「新歌材」を研究対象とする。以下の三段階で行う。

まず、古今集時代の「新歌材」を以下に示す二つの方向で全面的に精査する

(1)、漢詩文の影響とされる古今集時代の「新歌材」を整理する。

古今集時代の「新歌材」に関して、それが漢詩文の影響とされる先行論文や研究書を整理し、その中で言及された「新歌材」を一覧表する。

古今集及び古今集時代の私家集の注釈書で「新歌材」が漢詩文からの影響とされるものを一覧表にする。古今集に関しては新大系・新全集・新潮集成及び渡辺秀夫「古今集歌にみる漢詩文的表現 対照一覧稿」を中心に集める。古今集時代の私家集に関して注釈されている『貫之集』『伊勢集』『躬恒集』『忠岑集』『友則集』『兼輔集』『深養父集』『千里集』を中心に精査する。

(2)、漢詩文の影響以外の「新歌材」を網羅的に整理する

各注釈書で出典不詳とされる「新歌材」や初出と指摘される「新歌材」を一覧表にした。

注釈書のない私家集に対して、その和歌の題材を一首ずつ『新編国家大観』『新編私家集大成』で検索をかけ、それまでに見られない新歌材を網羅的に集める。

次に、以上のように収集してきた「新歌材」を、以下の研究方法で検証する。

(1)漢詩文の影響とされる古今集時代の「新歌材」を、三木雅博が提示した「受容→変容→再受容

再変容」という実証的方法のモデルを活かして検証する。まず万葉集などの上代和歌から派生してきた可能性を視野に入れる。そして、出典とされる中国漢詩文の表現方法や使用範囲などを考慮し、日本漢詩文での受容・変容を見極める。その上で、古今集時代の「新歌材」は具体的にどのように詠まれているのかという和歌の詠法に基づき、その影響関係を究明する。これらの検討から、古今集時代の「新歌材」の形成の様相を浮き彫りにする。

(2)漢詩文の影響以外の「新歌材」については、例えば屏風や年中行事に関わる「新歌材」は美術史や歴史学の先行研究と突き合わせ、多角的に新歌材の形成過程を跡づける。

さらに、以上の基本作業や研究方法を踏まえ、「新歌材」形成の多様化を体系化するために、その基本パターンを『貫之集』『躬恒集』から析出する。

#### 4 . 研究成果

- (1)、日本文学の題材に愛用される「白菊」が古今集時代の和歌に初めて現れてくる。「白菊という「新歌材」に着目し、日本・中国の文献を網羅して、「白菊」が和歌の歌材として詠まれるまでの形成過程を跡づけ、和漢比較文学大会で発表した。
- (2)、また、古今集時代の和歌に初めて「白き月光」を他の白きものとの見立てが見られるようになる。「白き月光」という「新歌材」を扱い、古今集時代に至るまでの過程を明らかにし、日本文芸研究会で発表した。
- (3)、さらに、「嵐」という「新歌材」を扱い、江戸時代の狩谷掖斎から古代、また中国の文献資料に遡り、その語源及び使用法を究明し、三回わたって水門の会『箋注倭名類聚抄』研究会で発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 蒲こうえん
2. 発表標題 古今集時代の白き月光の表現形式について
3. 学会等名 日本文芸研究会令和4年度第二回研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 蒲こうえん
2. 発表標題 古今集時代の 月下の白菊 の構図形成について
3. 学会等名 和漢比較文学会第41回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 蒲こうえん
2. 発表標題 『箋注倭名類聚抄』巻第一・天地部第一・風雨類二・「嵐」注釈及び考察
3. 学会等名 水門の会
4. 発表年 2023年～2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------